

◎新型コロナウイルス禍で考える日本の行方

◎第 11 回 コロナ禍の中の東京オリンピックが残したもの

全国日本語学校連合会 研究員 對馬好一

日本の厳しい夏の暑さに加え、新型コロナウイルス感染症拡大に翻弄^{ほんろう}された第 32 回夏季オリンピック東京大会の聖火^{せい火}が 8 月 8 日夜、東京都新宿区の国立競技場で行われた閉会式で静かに消えていきました。この聖火は 2020 年 3 月 12 日、ギリシャ・オリンピアで古式に則^{したが}って採火され、日本に運ばれました。コロナ禍による大会延期のため、福島県などで保管され、1 年後に国内全都道府県をリレーし、7 月 23 日のオリンピック開会式で同競技場の聖火台に点火されました。お台場の聖火台に移された聖火が燃え続けた 17 日間の会期中に行われた競技では熱戦が繰り広げられ、様々なドラマが生まれました。

留学生の皆さんの母国から参加された選手たちも、それぞれ自国民の方々の期待を胸に、誇りをもって競技したことでしょう。そして、205 の参加国・地域と難民選手団が参加した中、約 1 万 1 千人の世界中のアスリートたちと友情を分かち合っていたことを、世界中の何十億人もの人たちが見つめていました。

日本人最初の金メダル獲得となった 2 日目（7 月 24 日）の柔道男子 60 キロ級決勝戦^{じゅうどう}で高藤直寿選手^{たかとうなおひさ}が 7 分 40 秒の熱闘^{ねっとう}の末、台湾の楊勇緯選手^{ヤン ヨンウェイ}を破ると、双方が相手の手を取って高々と掲げ、健闘^{けんとう}を称えあったシーンは忘れられません。10 日目（8 月 1 日）の陸上男子 800 ㍎準決勝では、最終コーナーで優勝候補の 1 人、ボツワナのニジェル・アモス選手と米国のアイザイア・ジュエット選手が接触して転倒しましたが、お互い助け合っ立ち上がると握手し、肩を組むなどして一緒にゴールした姿には感動しました。

日本国民は、8 年前の「東京 2020 大会」開催決定以来、選手、大会関係者ばかりでなく、各国から訪れる観光客らに対しても「『お・も・て・な・し』をしたい」と準備していましたが、コロナ対策のソーシャルディスタンス確保や、それに伴う無観客開催で、ほとんどが空振りに終わりました。特に、全国各地のホストタウンでの外国選手と地元の子どもたちとの親密な交流が行われなかったことは、とても残念でした。

そうした中で、大会の延期が決定してから、国内では開催について多くの反対論^{うづま}が渦巻いていました。「コロナ禍で全世界の人たちの生命が危機にさらされている中、オリンピックで浮かれている時ではない」「全国小中学校の運動会がコロナで中止されているのに、なぜ、オリンピックだけは開催されるのだ」「コロナ対策で膨大な費用が掛かる中で、日本政府・

東京都が多くの予算や人々の労力をオリンピックにつき込んでいる場合か」…。世論調査では、こうした意見が7～8割を占めた時期もありました。大会が始まった後でも、増え続ける感染者数を理由に「途中からでも大会を中止する勇気を持って」などとソーシャルネットワーク（SNS）に書き込みがありました。

反対論を押し切って国際オリンピック委員会（IOC）や東京オリンピック組織委員会、東京都、日本政府はなぜ、開催を強行したのでしょうか。政治的問題や、IOCの財政問題、今後のオリンピック・パラリンピックの運営への影響もあるでしょう。こういう難しい問題を抜きにして考えると、無観客開催、一般外国人の来日規制、オリンピック関係者のバブル隔離による外出制限などがあるとはいえ、「スポーツには人を団結させ、世界を平和にする『力』がある」と関係者が信じていたことが大きいと思います。開催に懸念を表明していた新聞社やテレビ局は、大会が始まると一転して、大きな紙面、放送時間を割いて競技の様子を報道しました。テレビの^{視聴率}が向上し、SNSでの情報交換も華々しく行われ、日本国民ばかりか、世界中の人たちが競技に注目していました。

「スポーツの力」については、上皇陛下（先代天皇）が昭和天皇の皇太子だったころ“帝王学”の家庭教師、を務めた小泉信三・元慶應義塾長が昭和37（1962）年に、慶應大学の学生を相手に行った「スポーツが与える三つの宝」という講演に答えがあります。

学生時代にテニス（当時は軟式庭球）の名選手として鳴らし、教員になってからも体育会庭球部長や、大学の運動部を統括する体育会の会長を長く務めた小泉氏は講演で、「スポーツがわれわれに与える3つの宝は何か」と設問し、「練習は不可能を可能にする」「フェアプレーの精神」に続き、「宝の第3は友です」と述べました。

そして、「自分の過去現在を顧みて、私の最も良き友を体育会の生活のうちに得た」「何を言っても誤解しない友は生涯の友で、運動競技の体験を共にした間に得る友というのは格別です」（一部要約）などと、スポーツで得られる「友」について長い時間をかけて語り掛けた。

小泉氏の指摘通り、スポーツは生涯の友をつくる最良のツールでしょう。そして、この大会に向け、「練習は不可能を可能にする」ことを信じ、長年鍛錬を積んできた人たちが金メダルにたどり着きました。柔道や空手といった^{武道}ばかりでなく、陸上、水泳、レスリング、野球など、多くの競技の選手たちが、試合場や対戦相手、審判らに礼を尽くす姿はとてすがすがしく、「フェアプレーの精神」がありました。

その一方で、「コロナ禍の中、選手村で酒盛りをしたり、マスクをせずに騒いでいる選手がいた」との複数の報道があったのも事実です。しかし、多くの選手は、組織委員会がコロナ対策を含めて作った今大会の選手・関係者の行動指針「東京2020プレイブック」を守り、マスク着用などを励行していました。その結果、大会関係者の陽性率は7月1日から8月8日までの間に計430人で、空港での検査、スクリーニング検査に対してはそれぞれ0.1%

を下回っています。

そうした運営に対し、フランスのエマニュエル・マクロン大統領は最終日の8日、ツイッターに日本語で「^{ぜんだいみもん}前代未聞の状況下でしたが、皆で素晴らしい時間を過ごすことができました」と投稿（『産経新聞』東京発行9日付最終版）しました。また、閉会式では、IOCのトーマス・バッハ会長が閉会宣言の中で「困難な時代に、世界に希望という最も大切な贈り物をしてくれた。日本の皆さまは成し遂げたことを誇りに思っしてほしい」と、日本の運営を高く評価し、大会の成功をアピールしました。

オリンピックは平和の祭典であり、アスリートにとっては一生に1度あるかどうかの大目標です。そして、かけがえのない生涯の友を得る場でもあります。真剣勝負で行われる競技を見た一般の人たちには、スポーツの^{さわ}爽やかさと共に、コロナ禍のため^{へいそく}閉塞状況にある社会環境の打破に向けた勇気を与えてくれるものでしょう。

同紙によれば、IOCのクリストフ・デュビ^{とうかつ}五輪統括部長は閉会にあたり「世界が新型コロナウイルス危機に直面する中、（日本は）安全に大会を実現するという目標から一度たりとも逃げなかった」と評価しました。

コロナ禍を突いて行われたオリンピックは、長い人類の歴史の中でも特筆される大きな社会実験だったでしょう。そこで得られた経験は、間違いなく世界的大流行（パンデミック）を克服する力になります。これを踏まえて24日から始まる東京パラリンピックも盛大に行われることでしょう。そして、そこで得られた知見は、2022年2月4日から始まる北京冬季オリンピック・パラリンピック、24年のパリ夏季オリンピック・パラリンピックの運営に生かされることになります。

そしてこれからもしばらくは続く、先が見えないウィズ・コロナの時代を生きる日本はじめ全世界の人たちの生きざまや社会運営におおいに参考になります。大会開催がよかったのか悪かったのかは将来の国民が判断してくれることでしょう。

閉会式で英国選手団が着たジャージーに書いてあった「ありがとう東京」の文字がこの大会を振り返る歴史のキーワードになることを日本国民の1人として祈るばかりです。